

〈歌が記憶を呼び覚ます!〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

現在日本では高齢者の四人に一人、約四〇〇万人が認知症を抱えているという。「毎日がアルツハイマー」や「ベコロスの母に会いに行く」など家族の側から認知症の親との絆を前向きに描いた映画が話題を呼ぶのは、こうした高齢化の反映だろう。アメリカでは認知症（アルツハイマー）患者は五〇〇万人以上、その介護や医療にかかわる職業の人口はその倍にも上るといふ。そして、認知症に関して、日本とはまたひと味違ったこんな映画も――。

この映画の主役と言うべきか仕掛け人というべきか、中心となっているのは、ソーシヤル・ワーカーのダン・コーエン。かつてIT業界にいた彼は、iPodで思い入れのある曲（パーソナル・ソング）を認知症の人に聞かせれば、曲の思い出と共に自分自身や家族のことなど当時の記憶が甦るのではないかと考えた。早速老人施設へ赴き、実

際に試してみると……。これは、コーエンの熱意と不屈の努力と感動の実践記録である。つくづくと音楽の底知れぬ力を感じさせられる。

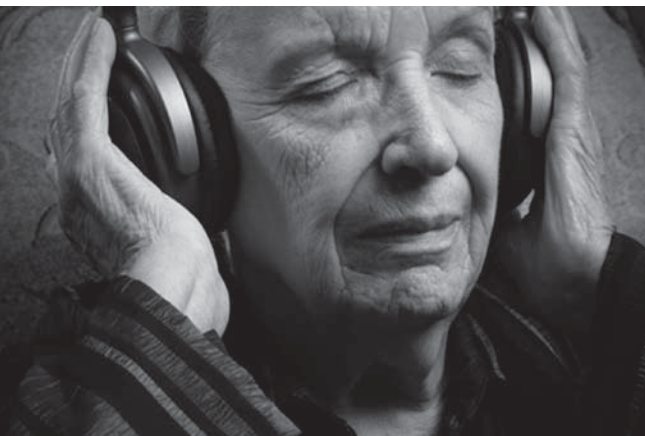
きっかけはベネット監督が老人ホームや病院で音楽活動を主宰しているダンの紹介で、九四歳の認知症の老人ヘンリーと出会ったこと。もう一〇年間も誰とも話さず、実の娘も見分けられず、ただうつむいて椅子に座っているだけだった。ダンがヘンリーの過去の生活から推測して選曲したゴスペルの曲がイヤホンから流れると、一瞬で表情が明るくなった。目玉が飛び出すくらいに目を見開き、背中を伸ばして全体でリズムをとり始める。ついに立ち上がり、昔自分が一番好きだったスキャット歌手の歌に合わせて、身振り入りで歩き回りながら歌い始めた。若いころの思い出を生き生きと語るその姿は、まるで音楽を通してヘンリーの

人生が甦ったようだ。長年、死んだようだった老人のこの劇的な変化は、まさに音楽が記憶にどのような刺激を与えるものかの証拠写真のようだった。

一回きりの取材のつもりでベネット監督は、以降三年間にわたってダンのNPO活動にかかわり続け、音楽がさまざまな個性、背景を持つ男女一人一人の心に働きかけ、そのかけがえのない人生の過去の記憶を蘇生させ、脳の活性化を促す姿を記録する。それはまた、監督とダンの仮説の扉が目の前で開かれ確信へと具現化するわくわくする人間ドラマでもある。実際、イヤホンからの音楽により自分自身を取り戻した女性が、顔を上げて社会生活へと帰ってゆく姿も描かれる。

音楽が認知症そのものを治療する方法かどうかはわからない。しかし、「音楽によって、アルツハイマーや認知症であっても感情を表すことが可能になり、自分自身の本来の人間性を甦えらせることができる」と監督は言う。

認知症の患者の脳そのものに働きかける試みは、医学的にも大きな挑戦だ。技術的経済的などの多くの課題を抱えながら、これもまた世界的高齢化の流れの最先端を行く映画といえるだろう。



『パーソナル・ソング』

アメリカ映画 (78分)

監督：マイケル・ロサト＝ベネット

出演：ダン・コーエン、オリバー・サックス、ボビー・マクファーリン

公開中

© ALIVE INSIDE LLC 2014